

ニュースアップ

岡山支局 五十嵐朋子

フィリピン台風 救援活動で国際会議

死者・行方不明者が7000人を超えたフィリピン台風の被災者を救援活動したNGO（非政府組織）のメンバーらが今春、マニラで一筆に会し、国際会議を開いた。現地では会議を取材した私は、悲惨な被害を改めて痛感する。一方、日本のNGOの果たす役割の重要性をかみしめた。加えて、アジアのNGOネットワークの未来に大きな可能性と期待を抱いて帰国の途について。

AMDAなど主催

会議は日本のNGO「AMD A」（本部・岡山市）と地元のNGO「フィリピン農村再建運動（PRRM）」が共催し3月8日に開かれた。昨年11月に台風30号の被害を受けたフィリピン・レイテ島などの町長らが被災状況を説明し、国内外のNGOが活動を報告した。教訓と提言をテーマに六つのグループに分かれ活発な議論もあった。台湾、マレーシア、インドなど約10カ国・地域から100人以上が参加した。会議は朝から夕方まで続き、通訳なしで英語が飛び交った。



台風が去った後のフィリピン・レイテ島タクロパンの様—AMDA提供

NGO助け合いに可能性

自宅はまだ住めず

被災状況を発言した人の中に、レイテ島タクロパンに自宅がある元レイテ州知事、ミミエツタ・バグラヤさん(58)がいた。「自宅から離れていて、家族の安否が分からず苦しかったと振り返った。どんな状況だったのだろうか。会議後にさらに話を聞いた。

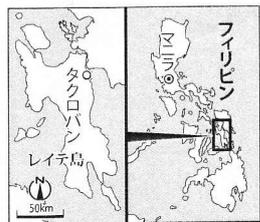
台風が比南部に上陸した11月8日朝、バグラヤさんは仕事でマニラにいた。自宅にいる娘に携帯電話で状況を聞いていた途中、通話が途切れた。

娘と一緒に高齢の母と義母、1歳と5歳の孫がいたという。午前7時ごろ、朝食準備中のヘルパーが浸水に気づいた。全員が2階に避難した途端、1階は泥水でいっぱいになった。家族は屋上に避難し、屋根もかぶるものもない状態で3時間耐えた。暴風雨は3回襲い、寒さも厳しかった。水が引くと、周囲には逃げ遅れた人の遺体があったという。

娘と連絡がついたのは上陸3日後だった。コンクリート製の自宅は流されなかったものの、まだ住める状態にない。バグラヤさんは「自然は人間にはコントロールできない。私たちは強くなるしかない」と話した。

現地のニーズに応じ

会議を共催したAMD Aは1984年代表で岡山市の医師、菅波茂さん(67)現在マレー



シア在任が設立した。医学生時代、カンボジア難民の支援を志して現地に赴いたものの受け皿がなく活動できなかったという経験から、アジアの医師たちとネットワークを築くのが目的だった。現在、インドネシアなど各国に30の支部を設け、災害時には本部や支部からスタッフを被災地に派遣している。台風30号では昨年12月までに医師や看護師ら25人をフィリピンに送り出し、PRRMや現地医師会などの協力を得て、巡回診療や物資の配布をした。

各国政府が大規模支援を展開する中、AMD Aは身軽に動いた。政府などの支援が届いたかを見極め、十分と判断すれば次の町に移る。数週間も支援が届かなかつた小さな町を訪れた時「忘れられていなかった」と喜ぶ人たちに迎えられた。

AMD Aのメンバーで看護師の山崎希さん(41)は活動の糸口としてPRRMに連絡したという。被災した町とのつきまじ役をお願いし、一緒に物資を調達した。「現地の人と話し、初めて何が必要かが分かる」と話す。菅波さんは会議で「東日本大震災で私たちが助けられた。今回は私たちがフィリピンを支援しているのは、『相互扶助』の精神です」と訴えた。

もう一つ、課題もある。PRRMのゴイー・ソリスさん(48)

会議では各国・地域から100人以上が集まり、支援活動を振り返った。マニラ市で2014年3月8日、五十嵐朋子撮影

壁を乗り越えて

NGOの支援にはまだまだ問題はあります。しかし、それを乗り越えようとする活気がマニラ会議にはあった。

参加者の多くは、台風30号の支援の場で一緒に活動したり、かつて別の災害現場で協力したりした経験を持つ。会場では、久々の再会を笑顔で喜び合い、会話を弾ませる姿があった。被災地の発表者から「国がしてくれていることには限りがある。私たちができることに取り組む、前よりもっといい町を作ればいい」という力強い発言もあった。ソリスさんも「台風をきっかけに、人々に助け合いの心が戻ってきた」と言う。

日没が近づき太陽が傾きかける頃、「マニラ宣言」が採択された。「将来どこかで災害があったらいつでも助け合おう」今後も台風30号の復興支援に協力する」などとする内容に、万雷の拍手が起きた。

一つ一つのNGOは小さい。しかし、集まれば多くの人を助けられることができる。国籍や文化、言語、宗教を超えて一体となった会場の雰囲気は接し、そう強く思った。